

黛秋津編 『講義 ウクライナの歴史』

(山川出版社 2023年)

伊 東 一 郎

本書は朝日カルチャーセンター新宿教室で2022年11月から2023年3月にかけて開講された連続講座「ウクライナの歴史——キエフ・ルーシから現代まで」を基に編まれたもので、それぞれ異なる分野の専門家による執筆者による11の講義から構成されている。その内容は——

- 第1講 概論 ウクライナの歴史 黛秋津
- 第2講 キエフ・ルーシ——ロシアとウクライナの分岐点 三浦清美
- 第3講 リトアニア・ポーランド支配の時代——14～18世紀の近世ウクライナ地域 小山哲
- 第4講 帝国支配の時代——ロシア帝国、ハプスブルク帝国下のウクライナ 青島陽子
- 第5講 ウクライナ・ナショナリズムと帝国の崩壊（1905～21年） 村田優樹
- 第6講 ウクライナにおけるユダヤ人の歴史 鶴見太郎
- 第7講 ソ連時代のウクライナ 池田嘉郎
- 第8講 ウクライナとロシアの歴史認識問題——ロシアの「非ナチ化」言説と「ナチ協力者問題」の背景 浜由樹子
- 第9講 ウクライナの正教会と分裂の歴史 高橋沙奈美

第10講 ウクライナの国家建設の挫折——ソ連解体の事後処理の観点から
松里公孝

第11講 ロシア・ウクライナ戦争と歴史的観点 山添博史

この目次からもみてとれるが、本書の特徴は中世から現代に至るまで、各時代の専門家によってウクライナの歴史が漏れなく記述されていることと、ユダヤ人、宗教など独立した主題にもそれぞれの専門家による独立した一講があてられていることである。またそれぞれの講義の最後に「私の視点」というコラムが設けられ、それぞれの立場から率直なコメントがなされていることも共同執筆という本書の特徴を生かした工夫である。

このような歴史書が生まれたのは、当然だが、ロシアのウクライナ侵攻という思いがけない事態がきっかけと思われる。この事態に対して一般読者が抱いたであろう多くの疑問に専門家が答える必要が出てきたからであろう。

現在まで独立したウクライナ史の概説書は我が国では単著としては黒川祐次『物語 ウクライナの歴史』（中公新書、2002）と中井和夫『ウクライナ・ベラルーシ史』（山川出版社、2023）しかなかった。ウクライナ史の全体を単著でカバーするのは至難のわざであるし、現今の事態から遡行して見えてくるウクライナの歴史像は論者の専門領域によってかなりの違いがある。その点で本書はウクライナ史の重要な局面を満遍なく詳細に浮き彫りにしてくれる。

第1講は概論である。コンパクトにウクライナ史の概要がまとめられている。「私の視点」で筆者は「ウクライナ国民のアイデンティティ」の意識を1991年の独立以降に形成された、としている。国民的アイデンティティと民族的アイデンティティは必ずしも同一ではないが、民族学研究者として評者はウクライナ人の民族学的アイデンティティの意識はウクライナ人によるウクライナ民族学研究によって19世紀に既に形成されていた、と考えている。

第2講はウクライナの起源をキーエフ・ロシアとその東方キリスト教の受容から説きおこし、ビザンツに特徴的なアウトクラトルの思想にプーチンの思考の起源を見てとっている。また当初からキーエフ・ルーシが国民国家の枠に収まらない存在であることが示唆され、第7講の帝国論の見直しの議論に結び

つく。ちなみにここではルーシという名称の多義性についてももう少し突っ込んだ説明が欲しかった。ポーランドではガリツィア・ウクライナを Ruś Czerwona と、現在のザカルパッチャ州を帝政ロシアではГалицкая Русь、両大戦間のチェコスロヴァキアでは Podkarpatská Rus と呼んでおり、この場合のルーシは地域としてはウクライナの意味である。Русьは Ruthenia の語源ともなっており、「ルーシ」の名で語られる地域を「ロシア」と単純に同一視すると、「ウクライナ人とロシア人の歴史の一体性」を語るプーチンに与することになるからである。

第3講ではキエフ大公国の崩壊と東スラヴの分裂という現在のロシア—ウクライナ関係の起源ともなるべき時代をポーランド史からの視点で扱う。ここではロシアとウクライナで見解を異にするボフダン・フメリニツキーの乱の歴史的評価の問題が最も重要であろう。

第4講は19世紀におけるオーストリア=ハンガリーとロシア帝国という二つの異なる帝国の支配下に置かれたウクライナの歴史を扱う。民族統治をめぐる二つの帝国の政治的思惑が、東西ウクライナ（ドニエプル・ウクライナとガリツィア・ウクライナ）がそれぞれの支配民族に対する独立への動きにどう影響したかがよく分かる。

第5講では帝国の崩壊によって高まることになったウクライナ・ナショナリズム、それによって一時成し遂げられたウクライナ独立の去就が詳述される。

第6講はウクライナにおけるユダヤ人の問題を扱う。これはウクライナ史を語るときに避けて通れない問題である。ウクライナ史においてボフダン・フメリニツキーは民族的英雄だが、ユダヤ人にとっては大規模なポグロムの最初の遂行者として知られている。ブコヴィナ出身のユダヤ人詩人パウル・ツェランは両親をウクライナのみハイロウカの強制収容所で失うが、父親の死を知らせる母の手紙を題材にした詩『黒い雪片』（“Schwarze Flocken” 1943）の中で母親に「……おお この世のものでない赤さの水——あのヘトマンが お供を皆引き連れて 暗くなっていく太陽たちの中へ歩いていく……」（中村朝子訳）と歌わせ、フメリニツキーの乱と切り離せないポグロムの歴史的記憶が語られている。

第7講ではソ連時代のウクライナの状況が語られる。ここでなされる帝国論見直しの議論は、ロシアとウクライナの関係をロシア人のウクライナ人に対する支配、という単純な図式に還元する見方に対する根本的な反省を促す。

第8講ではウクライナとロシアの歴史認識の問題が検討される。特にプーチンがウクライナ非難の際に口にする「ネオナチ」というレッテルの背後にどのようなロシアの歴史観があるかは、一般読者にも大きな関心を寄せるであろう。またそれに対してウクライナがどのような歴史観を対置しているかも読者の最も関心のあるところだろう。本講ではロシアがウクライナをあくまでもロシアの一部と認識しているのに対して、ウクライナにおいては独立前後からウクライナ史がウクライナ人によるウクライナ人の歴史として語られるようになり、多民族地域であるウクライナの歴史的特殊性が捨象される結果になっていることが指摘されている。

第9講は分裂しているウクライナ正教会の問題を扱う。キーエフ・ルーシに受容されたキリスト教がそれ以降たどった複雑な歴史が説明され、その結果、現在2つの正教諸派が併立することになったウクライナの宗教事情を分かりやすく解き明かす。願わくばスターリン時代に弾圧された西部ウクライナの合同教会〔ユニエイト〕（ギリシア・カトリック教会あるいはウクライナ・カトリック教会）についても触れて貰いたかった。この教会はカナダ、アメリカのウクライナ系移民に多く、両国で大きな影響力を持っているからである。

第10講はソ連崩壊後の各共和国の独立の波の中で、ウクライナが揺れ動きつつどのような歩みを見せたかについて述べる。第10講の筆者はこの問題については既に独立した一書を出版している。

第11講は現在も進行中のロシア・ウクライナ戦争について詳細な解説を加えている。ロシアによるクリミア併合、ドンバス紛争に至る複雑な歴史的経緯がその背景にあることがよく理解される。

以上が本書の内容の概略である。本書の特徴は、各論者がロシアとウクライナの双方に目を配ることによってバランスを取ろうとしていることである。しかしそのことが本書の全体の論調にロシアだけが悪いわけではない、というニュアンスを与えている点が気になる。国境を越えて侵略したのがロシアであ

る、というのは事実だからである。そもそも現在の国境を国際法的な意味での国境とはみなしていないらしいプーチンにとってはそうでないかもしれない。このことと関連するが、本書が一貫して「ロシアのウクライナ侵攻」ではなく、「ロシア・ウクライナ戦争」という表現を用いていることにはやはり違和感を覚える。各講の執筆者が必ずしもウクライナ史の専門家のみではないことには、論調がウクライナ寄りになりすぎないように、という配慮があるかもしれないが、「ウクライナ史講義」と銘打った書物にしては、参考文献にウクライナ語文献が少なすぎるような印象を評者は受けた。ロシア語を通して見るウクライナとウクライナ語を通して見るウクライナは明らかに違うはずで、その2つの対話的相関の中でウクライナの歴史も語られるべきであろう。またプーチンがロシアのウクライナ侵攻に先立つ2021年7月に侵攻の理論的根拠として発表した論文「ウクライナ人とロシア人の歴史的一体性について」を各講の執筆者が是非ともそれぞれの専門領域から分析、批評してもらいたかった。これに関連するが、記述が個別の時代とテーマに分かれているために、そもそもウクライナ史全体の枠組みがロシアの歴史家とウクライナの歴史家でどう違うのか、という問題が検討されていない。ウクライナ民族主義史学の祖と言われるフルシェフスキーの『ルーシーウクライナ史』が本文に殆ど言及されないのも、バランスを欠くように思われる（フルシェフスキーのウクライナ史観については〔阿部 1992〕を参照）。

本書はウクライナ史の全体を知るためには格好の良書だが、評者の印象と希望を述べる。まず本書の全体において「ウクライナ」のイメージがやはり第二次世界大戦後のソ連時代の国境によって規定されている。ウクライナではドンバス地方のロシア人の問題がどうしてもクローズアップされるが、逆のパターンとして18世紀末にエカテリーナ2世によってザポリッジャからロシアのクバン地方に移住させられた黒海コサックの歴史や、スロヴァキアとの西部国境の西に居住している東スロヴァキアのウクライナ人（ルシン人）の動向をザカルパッチャ州の歴史とともに述べて欲しかった（後者についてはイワン・ヴァナトによる歴史研究がスロヴァキアで出版されている〔Ванаг 1965, 1979〕）。

またウクライナの民族的自己意識の形成は19世紀から始まったウクライナ

人によるウクライナ民族文化研究と密接に結びついていると評者は考えているが（〔伊東 2024〕参照）、そのことについての記述がないのは残念である。そのこととも関連するが、ウクライナ地域の先史文化の記述がもう少し欲しかった。東スラヴの成立からウクライナ史の記述を始めるのは妥当であるが、プリツァークのようにウクライナ史をウクライナ地域に居住した複数の民族の先史文化にまで遡行して考える見方もある。例えばこの地域に栄えた新石器時代のトリピツリャ（トリポリエ）文化は特徴的な彩色紋様陶器で知られ、この紋様はウクライナではしばしばウクライナの刺繍やピサンキ（イースター・エッグ）の装飾紋様との関連で語られており、ウクライナ人の民族意識と密接に結びついているのである（〔Кульчицька 1995〕参照）。

最後に惜しむらくは索引がない。複数の執筆者により異なる視点から複数の主題にまたがって記述されている本書は、それぞれの講義を相互参照することによってより理解が深まると期待されるが、索引がないためにそれがしにくいのである。充実した本書の丁寧な記述はそれがあれば更に価値が高まったと評者は考えるものである。

参考文献

- 阿部三樹夫「ミハイロ・フルシェフスキイのロシア史学批判」山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺——歴史論集』ナウカ、1992年。
- ツェラン、パウル（中村朝子訳）『パウル・ツェラン全詩集 III』水声社、2002年。
- 伊東一郎「ウクライナの歴史と文化」『季刊民族学』第182号、2022年。
- 「ロシア・ソヴィエト民族学とスラヴ民族学におけるウクライナ——歴史的素描」『ロシア文化研究』第31号（本号）、2024年。
- Кульчицька, А. Орнамент трипільської культури і українська вишивка XX ст. Львів. 1995.
- 黒川裕次『物語 ウクライナの歴史——ヨーロッパ最後の大国』中公新書、2002年。
- 松里公孝『ウクライナ動乱——ソ連解体から露ウ戦争まで』ちくま新書、2023年。
- 中井和夫『ウクライナ・ベラルーシ史』山川出版社、2023年。
- Путин, В. Об историческом единстве украинцев и русских. 2022. (<http://kremlin.ru/events/president/news/66181>) [2024年1月30日アクセス確認]

Ванат, І. Нариси новітньої історії українців східної Словаччини. І. 1918-1938. Пряшлів (Prešov). 1979.

—— Нариси новітньої історії українців східної Словаччини. ІІ. 1938-1948. Пряшлів (Prešov). 1965.

